



R.C.report

前記。

ほとんどの方がはじめましてこんにちは、高木誠ですー。
男性向では二冊目です…。冬コミではコピ本だったので、オフでは初めてです。
んで、最初で最後のラグナロク本です。

なんで「最初」かっていうと、ラグナをプレイしてる時期は
こんな本作ってる暇なんか無かったの。
スキがあったらラグナやってたし。
なんで「最後」かっていうと、もうプレイしてないからネタや愛が続かないので (笑)。
お金払ってもプレイする時間無い人ですね…。
どうせやるなら廃人レベルまで極めたいので (笑)。

そんなこんなで脱・ラグナしたわけですが、
やはり一度くらい本は出したかったの。

今回の本は…時間ありませんでした…。
もうこんな言い訳なんて、どこのサークルの本でもお目にかかれると思うんですが…。
今は仕事しつつ夏コミ発売予定の同人ゲームも開発中でして…。
開発が行き詰まったり、スランプだったり、仕事でデバッグ期間に突入したりで…。
実は、本当はこの本も落とそうと思ってたのですが、相方・猪瀬えいじの協力で
こうしてなんとかカタチになりました。ほんとーに感謝です (泣)

なので、今回は合作らしくちょっと変わった趣向にしてみました。
…いや、普通なのか??ありがちなのかなあ??
同人誌って、友達の本と、少しの作家 (一桁程度…) のものしか読まないの、
流行とかありがちとか解らないんですが…。しかもエロなんて買わないし…。とほ。

そんなこんなで適当に楽しんで頂けると幸いです。

砂の舞う最果ての町、モロク。

灼熱の疾風が、ナツメヤシの大きな葉をかサリと揺らす。

生ある者を拒む広大な砂漠。そこにこんこんと湧く透き通った水。太古の時代からこの不思議な水は、多くの人々を惹きつけてきた。

砂嵐の中で凜然とそびえ立つ巨大なピラミッド。

王の魂を護る魔物が跋扈し、数多くの財宝が未だ眠っている。

冒険者は夢を求めてオアシスに集まり、そしてこの街が生まれた。

中央広場にはたくさんのテントが建ち並び、人々の賑わいは並の城下町では及びもしない。

そしてここにもまた、夢を追う者が一人。

「あのお。首都まで二人、お願いできますか？ 大丈夫…ですか？」

重厚な鋼の鎧に身を固めた騎士さんが、ぼーっと空を眺めていたわたしに声をかけた。

「あつ、はいっ！ お任せください！」

一緒にいたハンターさんがくすりと微笑む。ちよつとポケーつとしすぎてたかな……。

わたしについてもぼんやりしてるからなあ。マヌケっぽい顔してたならどうしよう。

でも心の中で思わずガッツポーズ。お昼でもう5組目なんて、今日はすごく運いいな。

空はいつまで見ても飽きないんだ。

砂漠ってお日様はキラキラして暑いけど、青空は世界で一番綺麗だと思う。

だからわたしはここでこうして空を見るのが大好き。

モロクにはいろんな人がやってくる。北からも東からも。男の人も女の人も。

時々言葉の通じない人も来る。でも、そんなのここでは誰も気にしない。

砂嵐を越えて、生きてやつとこの街に着いて、美味しい水をたっぷり飲んで。

商人さんが持つてきた世界中の珍しい果物を木陰で食べれば幸せな気分がいっぱい。

街の真ん中では芸人さんが笛を奏でたりお芝居をしたり。いつもとっても賑やかなの。

生きててよかった。わたしもあなたも。そんな気持ちで誰自然にわき上がってくる。

だからここではみんながお友だち。温かくて、いつも出合いがいっぱい。

魔力の宿る蒼き石を砂に置き、遠い彼の地を思い浮かべて意識を研ぎ澄ませる。

「ワープポータルっ！」

砂を抉るように青白い渦巻きが現れ、彼方への扉を開く。

わたしたちに神様が与えてくれた偉大な力。深い信仰の証。

「ありー♪」

「ありがとー」

騎士さんとハンターさんはシュンと光の渦に吸い込まれていった。

わたしはこの前、ようやく念願のアコライトに転職したばかり。

今はこの街で、ウサミミを買う為に日々ポタ屋さんをしています。

というのも、先輩アコさんがみーんなウサミミつけてるの見て、わたしも夢中になっちゃって…。

ウサミミって、すごい素敵だよ。可愛くて、綺麗で。

でも私は仲間もいないし、まだまだ弱いから…なかなか手に入れられないの。

だからこうやってポタ屋さんをして、少しずつお金を貯めることにしたんだ。

まだまだ買えるだけのお金には遠いけど…わたし、頑張る！

「ふう。えっとお…いくら貯まったかなあ？ ちよつと見てみよつと……」

首にかけてお財布を胸から取り出して、一枚ずつ金貨を数えてみる。

「ひいふうみい……。うーん…全然足りないよう。もっと頑張らないとなあ……」

ちよつとシュンとなつてしまふ。

「ううん、こんなところでへこたれちゃダメ！ ウサミミ頑張つて買うんだもんっ！」

おー！ つと拳を突き上げた。

通りすがりのマジシャンさんに、くすくすと笑われる。

一人でやつてて、ちよつと寂しい……しよんぼり。

その後もぼちぼちとお客さんが来てくれた。

砂漠をずっと歩くのは危険だし、それに次の街まではとても遠い。

この場所を選んで正解だったな。繁盛繁盛。

魔法でお金儲けするのは少し気が引けるけど、これも人助けだもの。

神様もきつとこれぐらいは許してくれるよね。

あつ！ ウサミミつけてる人がいた。いいなあ……。やっぱりすごく可愛いな。
 「……よしっ！ ダメもとで挑戦してみよう！」
 “ウサミミ譲ってください！”って、看板を出してみる。
 でも、ずーっと街頭に立って聞いてみたけれど……

「予算5000円？ わりいな、他を当たってくれ。首都じゃ倍以上で売れるんだ」
 「だつめー。アタシもタヌキやウサギぶち殺しまくってやっと手に入れたんだからー」
 「申し訳ない。これは異国へ旅立った友人の忘れ形見ゆえ譲るわけには参らぬ」
 「なにかレアカードと交換ならいいんだけどねえ。ごめんねえ」
 「これは装備ではなくて自前です。って引つ張らないでください、本当ですってば」

結局、ダメでした。

そうだよ。みんないろんな気持ちを込めて大事にしてるんだもん。
 これだけのお金で買いたいなんてやっぱダメだよ。……失礼だよ。……
 しょうがない、今日は夜も遅いし帰ろっかな。

今日はにんじんやおイモをお礼に貰っちゃったから、タご飯はカレーにしよつと。

「おい！ ねえちゃん！ ウサミミ欲しいんだって？」

私が荷物をまとめていると、突然長身の剣士さんが話しかけてきた。
 日焼けした肌は赤黒くて、目が少し細くて……抜き身の大剣を背中に紐でくくりつけている。
 まだ若そうだけど……ちよつと怖いかも。でもでも、ウサミミだつて！

「は、はいっ！ あ、でもわたしお金あんまり持ってないんです……」

剣士さんはわたしをじろじろと見た。なんか顔についてるのかな？ 恥ずかしいな。
 「なるほど……」いつあ良さそうだな

良いってなんだろう？

「……よし。ちよつと俺のダチの商人が在庫整理したいって言うてんだ。
 確かウサミミもあったかなー。俺が口をきいてやるから。一緒に来な」

「はいっ！ ありがとうございますっ！」

ああっ……神様、わたしは今日という日を感じたいしますっ！

「このとき剣士さんがニヤリと笑ったことに……浮かれていたわたしは、気づくはずもなかった。

街の中心から数十分は歩いただろうか。

古びた泥レンガ造りの建物が密集して並んでいる。

テントが並んで活気ある中心部とは正反対に静かで、風の音がやけに大きく聞こえた。

「ええっと……」つちつてスラムの方ですよね？

お仲間さんはみなさんこちらにいらっしやるんですか？」

「そうさ。町の中心は重いからな。古参の人間はこっちに避難しているんだよ」

「へー！ そうなんですか。わたし初めて知りました！」

初めて見るスラムの光景にきよろきよろしてしまった。でもなんか居心地悪いなあ。

窓の隙間からじろじろ見られている。この辺りってアコライトは珍しいのかな。

あつ、でも我慢我慢。安く買えるのを紹介してもらえらんだもの。

みんなスラムは近寄っちゃいけないなんていうけど、それはきつとただの噂だよ。

きつと本当はいい人がいっぱい住んでいるんだわ。

「ふう……。騙されやすい女だぜ」

「えっ？ 何かおっしゃいましたか？」

「いや。なんでもねえ。さあこん中だ。入ってくれ」

これでやつとウサミミ手に入るんだ。嬉しいな。頑張つて良かったな。

つけてみたらまず誰に見せよっかな？ みんな羨ましがるかなあ。

それとも誰か誘って冒険の旅に出よっかな。

今まではおどおどしちやつてなかなか知らない人に話しかけられなかったけど、

ウサミミつけたらなんかできそうな気がする。一人前の証みたい。

わたしは変わりたい。そしてきつと変われる。

ウサミミをつけて、わたしは新しいわたしになるんだ。

ああ、どこへ行こう。森に冒険にいこうかな。潮の香りのする港町もいいな。

そこで素敵な人と出会ったりして……てへへ。楽しみだなあ。

剣士さんが、ドアを開けて「どうぞ」と招き入れてくれる。

わたしはうきうきと中に入った。

ボタン！ と音を立てて木のドアが閉まる。

「えっと……」こんにちは！」

返事はなかった。

そしてわたしは、全身に痺れを感じて……そのまま意識を失った。



あれ・・・

どほらした

そうだ、私・・・

舌使えよ...
そう、そうだ

ちや...

ほ...



ほら、啜えろよ

歯ア立てんなよ...

じゅ じゅ



すげー...
すげーきもちいー...

うんっ
ぐんっ
ぐんっ

じゅ じゅ
いゅ いゅ



いきなり、アサシンさんに
ベノムスプラッシュャーを食らって...

イッ

キャー

ゆり (監)

ん、んむううううう!!
むーつつ!!

すっげ、ち●ぽ舐めてるだけで
こんなぐしよぐしよだぜ

つく…出る…つく…

ほら見るよ、クリ●リスまで
すげえガチガチだぜ

聖職者なのに、
こんなインランで
いいのかあー?

まさか…処女じゃあ
なかったりしてな

あつ…はあんつ、や…
ンコ弄らないでっ…

ま、そんなのは

挿入れてみりや
すぐわかんたる

ああああ
ひゃあああ

わっ、すげー
マジで処女じゃねえのかよ
アコライトのくせに

やああ…
う…熱い…

あああ
ひゃあ

誰に犯られたんだ？
神父か？それともスポアか？

ヒーヒー言ってるええで
答えろよ…
この淫乱女が

ひゃあああ…
乳首だめっ…

あ…っ…

はあ

わ…私が、昔修道院にいた頃…
憧れていた、女プリースト様に…
その…

なんだ？

夜、呼び出されて…
礼拝堂で、オモチャで、
そのまま…っ…

はあっはっはははっ
こいつあケツサクだぜ！

まさかそんな神聖な場所で、
神に仕える二人がマ●コに
オモチャ突っ込んでヒイヒイ
よがってたとはな！

おっと、そういや…
ウサギのミミが
欲しかったんだよなあ？

やだっ、そこは…！

淫乱なウサギにミミをつけて
あげる前に、じーっくり舐めて
イイコにして
やらねえとなあ？

やめえええ

ガキーン！ キカーン！
骸骨兵士の曲刀を、辛うじてバックラーで受け流す。重い。
必死でメイスを叩き付けるけど…鎧が固くて…歯が立たない！
どうしてこんなことに！

洞窟の前で一人でパーティを募集しているときに、みんなが声をかけてくれた。
寂しそうだね、一緒に来る？ って。みんなとても優しく、そして強かった。
新米アコライトの僕は、後ろでヒールをすることしかできなくて。
それでもとつても楽しかったんだ。なのに…。

突然みんな金縛りみたいに固まっちゃって。
いったいどうしちゃったの？！

「ら、らぐだ…」って…どういう意味？

みんなは動けないまま、骸骨兵士に囲まれて殺された……。

僕は逃げることもできなかった。弱いから。
僕が一人前のプリーストだったらみんなを助けられたのに！

「ちくしょう！ ちくしょう！」

骸骨兵士の頭を狙ってメイスを振りかぶる。でもその一撃はひらりとかわされた。
曲刀がうなりをあげて滑り込んでくる。

(やられる……！)

その瞬間。骸骨兵士の動きが止まった。そして、がらがらと骨が崩れ落ちる。

「な……何が…起こったんだ？」

土煙の奥からゆつくりと、ウサミミをつけた美しいプリーストさんが現れた。

「危ないところだったわね…だいじょうぶ？」

「あ、ありがとうございます…」

「あなたのレベルでは、一人でこんな奥に来てはいけないわよ」

「あ…お、お姉さん！ みんなが！ みんなが…やられちゃったんだ……」

僕はその場に座り込んでしまった。情けない話だが足がすくんでしまったんだ。

「そうだったの……。辛かったでしょう。でもあなたは生きることが出来た。生きるというのはとても素晴らしいことなのよ。良かったわね……」

「でもっ！ 僕にもっと力があれば……。みんなはきつと……。っ！」

ぐっと口唇を噛む。お姉さんは、黙って僕を見つめていた。

「お姉さん。どうやったらお姉さんみたいに強くなれるんですか？ 僕はなりたい。お姉さんみたいに強くなりたい！」

お姉さんは目を細めて優しく微笑んだ。

「それはね。人の喜ぶことが自分の悦びだと感じるようになることよ。

一生懸命に「奉仕するの。それが神のお定めになった道なのよ」

「奉仕……。僕は旅をすることばかり考えてて……。そんなことすら忘れてて……

これじゃあアコライト失格だ……」

「他人の悦びのためになんでもできるようになるとき、人は強くなるのよ。

どんなに辛くても、いつかそれは幸せになる。

そう感じられるようになったときが、一人前の証なのよ」

「そうか……。ありがとうございます。僕、頑張ります！」

「ふふ……。じゃあね。今度は気をつけて……。っ……ん！」

お姉さんは突然よろめくと、そのまま座り込んでしまった。

「大丈夫ですか？！ まさかさっきの戦いでケガでもしたんじゃない？」

僕はお姉さんに駆け寄った。ヒールをかけようと抱きかかえた。

「こんなに汗かいて……。熱もす……。どこが悪いのですか？」

「い、いいのよ……。気にしないで……」

「だめです！ ヒールなら僕も使えますから！ お姉さんのためなら何でもしますから！」

「……お願い、もう行ってちょうだい……。早く……」

「何言ってるんですか！ お姉さんを放っておけるわけないでしょう。

さ、とりあえず横になってください」

グイグイグイ……

何か羽音のように震える音がする。何だ……？

お姉さんの……スカートの中？

「お姉さん、いったい……」

「ダメ！ 見ちゃダメ！ やめてえ！」

でも好奇心が勝ってしまった。綺麗なお姉さんのスカートの中。

どうなってるんだろう。ああ、僕は聖職者なのに。こんな卑しい気持ちになって。いや、違う。これは治療なんだ。お姉さんを僕は助けなきゃ。

さっきお姉さんがいったじゃないか。人のため。人助けをするんだ。だから見るんだ。そう、だからなんだ。

「お姉さん、ごめんなさい！」

ぱつとスカートをめくりあげた。

お姉さんは下着をつけていなかった。

そして……おちんちんみたいな黒いものが……あそこから生えていた。いや、生えているんじゃない。ぶるぶる震えてる黒いのがお姉さんに入っているんだ。

「お、お姉さん、これ……」

「見てしまったのね……ふふ。悪い子……」

「ごめんなさい、ごめんなさい！ 僕、僕はその……ああっ！」

お姉さんはズボンの上から僕のおちんちんをきゅっとなんだ。

「固くなってる……。私のいやらしい姿見て興奮しちゃったの？」

「わ、わわ分かんないですう！ なんか、なんか熱くなっちゃって……」

「いいのよ。嬉しいわ。ねえ、私もう我慢できないの。あなたの、ちようだいね……」

お姉さんは僕のズボンのチャックを口ですーっと降ろすと、

僕のおちんちんを手でそっと包んで、先っぽをちゅぶって口で啜えた。

「じゅむ……んむ……はあっ。ふふ、すごい。またこんなに固くなっちゃって……こんなに大きくなって。これなら十分入るわね」

お姉さんは、今まで中に入っていた黒いものをずぼりと引き抜いた。湯気が上がってねっちよりと液が糸を引いていた。あんなものが入っていたなんて……。

「ねえ、何でもしてくれるって言ったよね、新米アコ君？」

「は、はい！ 僕、お姉さんのためなら何でもします！」

「その気持ちは立派なプリーストになる大事な一歩目なのよ。偉いわ」

お姉さんはゆっくりと僕を横たえると上に乗った。そして……僕の肩を抱えてその綺麗な唇を重ねた。

「んんっ?!」

唇から舌がゆっくりと入ってきて僕の舌や歯や唇をねっちよりと舐め回した。なんか頭がぼーっとしてきて……。ドキドキして。

じゅちゅっ……くちゅっ……にゅむ、ねちゅくちゅ……

「ん……むう……んぐ……んん……む……ちゅぶ……」

僕はとろんとした目でお姉さんを見ていた。頭がぼーっとする……。力が抜けて、喉がちりちりして……。すごい嬉しい……。

お姉さんは僕の腰を抱き寄せて……。おちんちんを優しく掴んだ。

「ひゃあっ?」

「私を気持ちよくさせてちょうだいね。あ……はあっ……!」

お姉さんはあそこに僕のおちんちんを当てた。どろどろに濡れてる……。

ずぶずぶじゅぶじゅぶ……

「は……んあ……入った……わ。ああ……やっぱり本物が一番いいわ……」

「ああっ！ お姉さんの中柔らかくて……熱いよおっ！」

「もう我慢できないの……バイブじゃ足りないのお……」

「おちんちんちようだいっ！ 私のオマンコずぼずぼしてええっ！」

お姉さんはずぶりと腰を入れた。

おちんちんがきゆうつて締め付けられて……すごい気持ちいい！

「おちんちん！ おちんちんが入っているのぉ！ もっともっとおっ！」

じゅぶ、じゅぶぐうっ、びちゃ、ぐじゅうっ……

「ね、ねえ、お願いっ！」

「は、はいいいっ！ くうっあああっ！」

「おちんちん突いてえ！ 奥をずぼずぼしてちようだい！ 叩き付けてえ！」

お姉さんは涙を流しながら腰を振っていた。

お姉さんよくて……胸が熱くて……気がつく僕も自然に腰を振っていた。

お姉さんの綺麗な白いお尻をぎゅつと掴んで力の限り突き上げた。

「はああああっ！ これ欲しかったのぉ！ 奥に当たって気持ちいい！

もっともっともっともっとおっ！ もっとオマンコ犯してくださいっ！！！」

「あああああっ！ お姉さん、気持ちいいよおっ！」

「いいのよ、たくさん気持ちよくなってるえ！ だから私をもっと犯してえ！

私を使って気持ちよくなってるちようだいっ！」

「お、おねえさあああん！ 僕、僕あああああ！」

「いいわよ、来て！ 私のオマンコにいい出してえ！」

「はあああっ！ あ、熱い……精液いっぱい……嬉しい……」

お姉さんはゆっくりと腰を上げた。

おちんちんの入っていた割れ目からどろどろと白いのが溢れた。

同時に、頭がすうっと冷えていく。

そして、自分のした事を理解して、いてもたってもいられなくなった。

「お、お姉さん…ほくツ…ごめんなさい！ごめんなさいっ！」

「あら…どうして？こんなにいつぱいくれたのに…」

お姉さんは、ぐいっとアソコを広げて僕に見せ付けた。

お姉さんは「こんなにキレイなのに…そこだけ別の生き物のように、ぬらぬらと紅く色づいていた。

そして、中から僕の出した白いのが、ドロドロと零れてくる…」

「いいのよ、もっとなりたいんでしょう？さ、遠慮しないでいいの…」

「そんな…どうして？」

「かーはっはっは！ボウズ、この女はそんなヤツなんだよ。

精液腔にぶちまけられて、悦んでるような淫乱ウサギなんだよ！なあ！」

「突っ込んでやったバイブじゃ足りなくてガキを誘惑するなんてノーマナーだよな」

突然、剣士さんやハンターさんがゾロゾロと現れた。

男の人ばかりだ…一目見ただけで、強そうだった解る。

「なあ？おめえはガキのチンポ啜えこんで悦んじまう変態ウサギなんだよな？」

「はい…そうです。とっても嬉しいんです。ご奉仕幸せです」

お姉さんはうつとりとした目で剣士さんを見上げた。

「おい。戦い続きでちよつと興奮しちまってるんだ。おまえを使わせてもらおうぜ」

「はいっ！私を使ってください！精液処理ウサギで気持ちよくなってください！」

「ガキのザーメンでドロドロじゃねえか。こんなの俺に使わせる気か？」

「す、すいません。いま綺麗にしますから」

お姉さんは自分のおなかに手を当てた。ぱーっと淡い光が指の隙間から零れる。

「アクアベネディクタ！」

光が消えると白濁液は消えて…あそこからちよろちよろと透明な液となって流れ出た。

「ひゃあっーはっは！てめえのマンコは空き瓶と同じだな！」

いつも精液ためこんでるもんな！こっすりや孕む心配もねえし本当に便利だぜ！」

お姉さんはふらふらと剣士さんに近づくと、ズボンをあけておちんちんに愛しそうに頬を寄せた。

「ねえ、新米アコ君？」

「は、はいっ！」

「君も早くご奉仕の悦びを覚えるのよ。とっても幸せなんだから……」

「おい、早く啜えろ。いつもみたいだに『ご奉仕』しろや。なあ、可愛いウサギさん？」

「はい。ご奉仕させていただきます。ありがとうございます……」

お姉さんは心底嬉しそうにおちんちんを飲み込んでぺちやぺちやと舐めた。

その後剣士さんの仲間がやってきて、お姉さんのあそこやお尻におちんちんを入れて……

いっぱい白いのお姉さんにかけていた。

お姉さんは白いのをかけられるたびに、ぶるぶると身体を震わせてお礼を言っていた。

これが。

これがブリーストなのか。

これが僕の目指すべき道なのか。

これが……神の定めたもうた我らの道なのか。

「おいボウズ！ どうせならためえも加われや。たっぷり味わってみろよ。ほら、今度はこっち使え！」

剣士さんはお姉さんのどろどろのあそこになんじんをズブリと突き入れると、

お尻を掴んでこちらに向けた。

「さあ。開発済みのウサギのケツだ。まれに見る極上品だぜ。ぐいっといけ」

「ああ、来てください……私のお尻ズボズボ犯してください……」

お姉さんは切なそうに涙を流していた。

僕は。

僕はお姉さんを助けるために。

そうだ、助けるために。

固くなったおちんちんをゆつくりとお姉さんの中に入れていった。

じゅぶっ、じゅぶっ、ぐじゅっ、ずぶっ……

「ああ、お尻いっぱい使ってください！ おちんちん気持ちよくなってくださいい！」

おちんちんはどんどん固くなってお姉さんの中を擦りあげる。

「おらおら、ガキのチンポケツに突っ込まれて腰振ってのか？ いい眺めだなあ」

「はいっ！ 私はいやらしいですっ！ チンポが大好きなんですう！」

スツと目の前にワープで現れる。神の使徒からは逃げられない。

「いやあああ！ 助け」

「速度減少！」

「鬼ごっこはおしまいだ。さあ、僕が快樂の頂へ連れて行ってあげるよ」
「どうして！ どうして私を犯すの？！ 何の恨みがあつて！」

「恨み？ そんなものはないよ。これは慈悲だ。
人間としての最大の幸せを教えてあげるんだよ。交わりという悦びをね」

泣き叫ぶ女に猿ぐつわをかませて、ずぶずぶとペニスを突っ込む。

すぐに快樂に負けて腰を振る女。
そうだ。それでいい。もっと喜べ。これが人間に与えられた幸せなのだ。

ずぶずぶずぶずぶずぶ……

「んー！ んんんーっ！」

「ほら、イッチまいな！」

どびゅっ！ ぶしゅっ！ ぶしゅぶしゅびゅるっ！ ぶくぶくぶく……

ああ。今日も人のために役に立った。

お姉さん。見てくれていますか？

僕は立派なブリーストになりましたよ。

人々に奉仕するというのは、本当に素敵で、幸せなことですね。

ああ、もっと頑張らなければ。

お、あそこにノービスがいるな。

キヨロキヨロして……田舎から出てきたばかりなのかな。

よし、今度はあの子に幸せを教えてあげよう。

ゆっくりと僕は彼女に近づいていった。

こうきです。

あい…ど…どうでしたでしょうか(汗)

まだエロ漫画は超初心者なので、不安なんですけど…。
宜しければ感想とか頂けると嬉しいです…原動力になりますので…。
あ、文句とかはいいりません…(ヘタレ)胃が今以上に壊れます…。ひーほー。
「こんなエロ描いて!!」とかいうリクエストも大歓迎です♪

というわけで、後記です。
編集とか時間とか印刷所の関係でヘンな終わり方でスミマセン。
本当は対談とか色々あったんですが…もうアウトです…。ぐは。
もつとちゃんと描きたかったです…。ちんことかちんことか…。
いえ、ちんこはかなり頑張ってる描いてますですよ…ふふ。
つーかあんまラグナっぽくありません。すみません。

んで、裏付のページでもちろつと紹介してますが、
夏コミに向けて同人ゲームもこっそり？作っております。
無事に発売された際にはお手にとつて頂けると幸いです。
かなりの時間と労力とその他諸々…たっぷりつき込んでおります…。
最近では、「なにしてんだ？オレは」みたいな望郷の念にかられることもしばしば。(謎)
鬱になってみたり身体壊してみたりしています。あふー。
あんま露出ないですが、かなり頑張ってます…。うう。

今回の漫画もゲームのテキストも、エロを書こうとすると
どうも百社のアレと被る傾向が…。いかんいかん…。
精進したいんですが…どうやって精進すればいいのかと。

ていうか…色々書いてて…エロがよく解らなくなってきました…
ただ突っ込んで擦るだけなのに裏が深いですな(壊)

次回イベントは夏コミです。受かってたら、ですけど。
ばっちりゲーム出せたら良いなーとか思ってます。
サークルカットには新刊出すとか書いたような気がします…。
そんな余裕無いかも…(汗)。

その時もデバッグ期間で死んでると思いますし。がふー。
何せ夏ですし!!私は夏に弱いのです!!外に出られないのです!!
日光に弱い人です!!マジで。目も弱いし…。

それでは今回はこの辺で。夏にゲームでお会いできる事を祈って。

2003.3. 某日 高木誠

今回もホイミン本



出せんからさよう…

カゲ、フマス。

妖怪蹂躞パズル＋アドベンチャー

「お兄ちゃん…ごめんね」
妹は、その言葉を残して忽然と姿を消した。

「菜乃は、いけない子なの。だから…ごめんなさい」

涙で滲んだ文字だけが、真実を知っていた。

…夏は、まだ終わらない。



それなりにストーリーを解釈し、再構築して制作しました。
全く違うものに仕上がったと思います。
勝ち抜き型なのですが、シナリオはかない充実しています。
判断材料は少ないのですが、制作は順調に進んでおりますので
是非ご期待下さい。貴方の感想を必ず満足させます！(笑)
あ、めっちゃ鬼畜破壊です…苦手な方はご注意下さいませ。

2003年8月17日 発売予定
WINDOWS専用
CD-ROM 1枚組
予価：1500円
※スベック調整中※

色々な事情が絡み合って、発行が決定したこのゲーム。
同人ゲーム「影踏み」の同人ゲームです！(笑)
内容は、ぶよぶよ形式の落ち物パズルゲーム。
登場キャラはフルボイス！君の連鎖に華を添えるぞ！
そして、勝利した後はお楽しみのエッチシーン。
イベントCGは100%がHなCGだ！！
web上では現時点で公開されていないが、
こちらで線画を先行公開♪
↑は囃天狗の姉・藤花。似ないのはご愛嬌。
←は鈴のHシーンです。なんかめっちゃ絡まってます…。
↓は美紅のHシーン。彩色途中です…(苦笑)



18才未満の方は、このゲームを購入できません。(18才でも高校生の方は不可です)
また、過度な性表現に嫌悪感を覚える方、興味を持たない方は購入をご遠慮ください。
本品には一部卑劣に類する行為・過度な表現が描かれておりますが、当サークルが
それらを賛美・推奨するものではありません。この作品はフィクションです。
登場する人物・地名・団体名等は架空のものであり、実際のものとは一切関係ありません。
「影踏み」は「ふるり」様の著作物です。当ゲーム・サークルはふるり、様とは一切関係ございません。

<http://f10.aacafe.ne.jp/~dcweb/>

♪告知サイト開設中♪是非お立ち寄り下さい！！

発行：DARK CASTLE
発行人：高木誠
発行日：2003年4月29日
印刷：ポプルス様

「DARK CASTLE」website(改装中…)
<http://makoto.s10.xrea.com/x/>
☆禁無断転載とか色々。☆



DARK CASTLE

MAKOTO.T